蒼ざめた肌

蒼ざめた肌

ポケット文春 155

1965年12月20日　第1刷発行

定価 250円

著者　戸川昌子 ©

発行者　上林吾郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 図書印刷
製本 中島製本

Printed in Japan

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

蒼ざめた肌

推理長篇

戸川昌子

文藝春秋新社

我が処女なる女と此男の妾とあるにより
我これを今つれいだすべければ
汝らかれらを辱しめ
汝等の好むところをこれに為せ
唯この男には斯る愚なる事を為すなかれ

（士師記　第一九章二四）

第一章　妻の疑惑　五
プロムナード　A　五九
第二章　死者の身元　六七
プロムナード　B　一〇九
第三章　夫の変身　一二五
第四章　死者の蘇生　一七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

装幀　鈴木　正

第一章　妻の疑惑

1

闇であった。

赤や緑やコバルト色や、稲妻状に走る強烈な光線が夢の中で実子を圧しつぶしていた。ひどい寝汗だった。悪夢から逃れようとして必死にもがいたようであった。

しばらくして、徐々に現実が実子の夢の中にすべりこんできた。

その夢うつつの中で、自分を圧しつぶそうとしているのが、夫ではないかと考えていた。夜中に、ふいに実子の躰を自由にしようとする夫の身勝手な欲望の習慣が、そう思わせたのだった。

けれども、やはり夫ではなかった。誰もいなかった。

実子はダブルベッドの上の自分の隣をさぐり、その手が冷たいシーツの上を空しく滑ってから、その事実を認めた。

こんなことを、もう一週間も繰りかえしていた。いつも夜半に悪夢にうなされて寝返りをう

ち、無意識にベッドの隣をさぐってはひどい失望を味わうのだった。
今夜も実子はベッドの上にゆっくりと上半身をおこした。恐しい闇が部屋をおおっていた。けれども今夜は、いつもとは少し違っていた。
闇を見つめているうちに、ふいに思いあたることがあったのだ。なにかがしきりに浮かんでこようとしている。それは夫の失踪が、確定的になって以来、いつも胸のあたりまで浮かびあがっては、そのたびにどうしても言葉にならないものであった。
実子は闇の中をじっとみつめて、ここ一年間、とくに夫が失踪する二ヵ月ほど前の出来事を思いかえした。
やはり夜中だった。実子はぐっすりと眠っていた。迫っているファッション・ショーの出品作品のせいで洋裁学院の講義も休み、ずっと徹夜を続けていたのだった。ふと、夜中に目覚めた。重い不快な感じが後から実子を圧しつぶしていた。覚めきらない意識の中で、それがなんであるか、よくわからなかった。ただの重圧感であり、躰を光線が突きさすような不快感であった。いやな夢を見たのだと思った。昼間見た、イタリア製の布地の原色が、夢にあらわれたのだと思っていた。
朝になって、微かな異常をネグリジェだけの下半身に感じた。人には言えない性質のものだった。たぶん夜中に、隣に寝ている夫が、自分の躰を自由にしたのだろうと思った。しかし、それにしてはいつもと違うようであった。口ではっきりと言えなかった。まして、夫にはっきりと尋ねられることでもなかった。

「昨夜……」

と、それを実子は聞いた。

「疲れているきみを起こすのは気の毒だと思ってね……」

夫はほんの少し表情を動かしたあとで答えた。しかし、それ以上の意味をつかむことは不可能だった。ただ下半身に消しがたい不快感だけがはっきり残っていた。それはどんな夫婦の間でも、絶対におこり得ることではなかった。

しかし、その妻の疑惑は、いそがしい日常生活の中にいつか埋没して行った。

結局、こんな無意味な解答のない考えに、毎日取り憑かれるのは、夫の失踪になんの心当りもないからなのだと、実子は思った。

事実、何べん考えても、一週間前から一言の連絡もなしに夫が帰ってこなくなったわけが、どうしても実子にはわからなかった。

勤め先から問い合せがあって、はじめて夫が無断で休んでいることを知った。今までに一度もないことだった。変事があったと考えるより仕方がなかった。しかし、それから一週間ものあいだ、警察からもどこからも、夫の事故を知らせるような連絡は来なかった。

夫が失踪して、どこからも知らせがなく四、五日経つと、自分の意志で家出をしたのだと実子は思うようになった。

夫の家出という考えには、かなりの現実性があった。ある日ふいに姿を消してしまう家出人——いつかそんな記事をどこかで読んだことがあったのだ。

実子の印象にはっきり残っているのは、テレビの画面だった。職人の夫に家出された若い妻が、腕の中の子供をゆさぶりながら、

「なぜ、あの人が急に家出してしまったのか全然わかりません」とアナウンサーの質問に答えていた。そのうら若い妻の表情には、あらゆる家出の原因を考えたあとで、とうとう答えが見つからずに絶望し、諦めきった表情があった。

実子は、あの人妻のような立場にだけはなりたくないと思った。自分だけは理由を知った上で、夫の家出の自由を認めたいと思った。しかし結局はその人妻と同じように、なにもわかりはしなかったのだ。

実子は眠れぬままに起きあがると、机の前のスタンドをつけた。明日は、また生きていくための仕事があった。世間体を保つために、夫の失踪に耐えているふりをしなければいけなかった。

こんな無意味な考えに、毎晩取り憑かれているわけにはいかないのだ。

実子は、翌日の、洋裁学院の生徒たちに教える講義の下調べを始めた。けれども十分とは続かなかった。

そろそろ警察に、夫の失踪を届けたほうがいいのではないだろうか。身内の人間に、くわしい相談をしたほうがいいのではないか。

身内といえば、実子と夫の縁談をすすめてくれた伯父夫妻しかいなかった。伯父は東京フランセーズ・ドレスメーカー学院を経営し、実子は学院の教師をしていた。けれども、その伯父

夫妻を失望させるような夫の失踪を知らせることが、ひどく辛いことに思えた。

次から次へと目先の悩みごとが湧いてきた。

生徒たちにも、寝不足の疲れた顔を見せるわけにはいかないのに、また堂々めぐりの疑問が、疲れた実子の頭の中で廻りはじめた。

今までに、一度だって不満な顔を見せなかったのに、夫はなぜ私に黙って家を出ていったのだろうか。

翌朝、実子は伯父の院長に、夫の失踪を電話で知らせようと思った。顔を合わせるのが辛く、電話でならば話せるような気がしたのだ。

2

東京フランセーズ・ドレスメーカー学院の校舎は、八角形のガラス張りの建物だった。午後三時になると、建物の西側にきつい日射しが当りはじめる。

四時間目の講師の桑原実子は、いつもの習慣にしたがって、窓のブラインドをおろしてから教壇に立った。それで、教室いっぱいにブラインド越しの縞模様の陽の光が、一斉にチカチカと踊った。

冷房がきいているが、夏の日の午後の教室には、どうしてもだらけた空気が流れてしまうようであった。

それでも大きな教室のほとんどを生徒たちが埋めているのは、実子の美しさと上手な教え方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

に生徒たちが魅かれているせいかもしれない。
実子は、そんな生徒たちを一わたり見渡すと、出席簿を開き、つとめて弾んだ声で生徒たちの名前を呼びはじめた。自分の憂鬱な気分を、生徒たちにまで伝えたくなかった。
十人ほどの生徒の名前を呼んだあとであった。実子は十和田熱子の名前を呼んでから、いつもの物憂げな調子を帯びたその生徒の返事がないのに気がついた。出席簿から顔をあげて、ゆっくりと教室の中を見廻したが、いなかった。念のため、もう一度十和田熱子の名前を呼んだが、やはり返事はなかった。
二十歳の、大阪から出てきている生徒だった。
実子の視線は、自然に窓際の一番前の席に落ちた。十和田熱子はいつもその席に坐るのだった。
誰も坐っていないその机の上にも、先程おろしたブラインドがまだ揺れているせいで、縞模様の影が水面のようにゆっくりと動いていた。
実子が一瞬、記憶の糸をたぐろうとしたのは、その揺れ動く影のせいかもしれなかった。あとでそう思った。
十和田熱子は、実子の時間に遅れてきたことがなかった。いつも早くから来て一番前の席に坐った。目の大きい個性のある顔をしていた。大きく一杯に開かれた目は、なにか心の痛みを訴え続けるように、授業のあいだずっと実子の顔を熱心にみつめているのだった。
あの目はなんのためだったのだろうかと、光と影の縞模様を見ながら実子は思った。そして、

この生徒のことを聞いてみなければいけないような義務感に駆られた。
「十和田さん、ずっとお休みなの」
「ええ、もう一週間近くお休みなんです。もしかしたら故郷に帰っているのかもしれません」
前の席の生徒たちが、顔を見合せながら自信なげに答えた。
「そう……一週間もお休みしてるの」
実子はおうむ返しに、呟くように答えた。その言葉になんの意味もなかった。
そのくせ、一時間の講義のあいだ、実子はなんとなく落ちつかなかった。ときどきなにかが気にかかった。
それは、昨夜ふいにベッドの上で思いついた夫の夜中の行為のことかもしれなかった。その意味をさぐって、今日も一日中ずっと気持が冴えなかったのだ。
実子の今日の講義は立体裁断に関することだった。型紙を使わずに、モデルに布をあてがい躰に合せて虫ピンを打ってゆく裁断方法の話をしながらも、妙に気がのらなかった。
「立体裁断というのは、モデルに合せてピンを打ち、裁ってゆきます。ですから実際の人間の動きにも、よけいなしわやたるみが出来なくてすみます。あらかじめ型紙をつくって裁断する方法ですと、出来上ったものに必ずずれが出来るのです」
ときどき、自分はなにを喋ろうとしているのだろうかと不安になった。
考えているのは、いなくなった夫のことだけではないか。
夜も昼も無意識のうちに、夫のいなくなった理由を考えているのであった。

それも、警察に捜索願を出すとか心当りを尋ねてみるとか、現実に即するようなやりかたは、何一つとしてしていなかった。あれこれと無意味なことを考え、夜中、空想の型紙を切っているだけであった。

講師の控え室にもどってきたとき、部屋の中の空気がいつもと違っていた。実子のことが話題にのぼっていたらしく、人々の態度がなんとなくぎごちなかった。

夫の家出が、学院にまで知れわたっているはずはない。今朝実子が電話で相談したとき、院長の伯父は他言を慎むようにと厳しい声で言ったのだ。

けれども伯母が大事件とばかり誰かに喋り、それがもう職員室の噂にまでひろがっているのだろうか。院長の姪である実子に対して、人々の視線は遠慮がちであった。

実子はその妙な雰囲気を無視すると、二年担当の篠原の机のそばへ寄り、

「ちょっとお尋ねしたいんですけれど、十和田熱子という生徒を御存知？」

と話しかけた。

「いま生徒に聞いたんですけれど、ここのところ、ずっとお休みしているようですね」

「ええ……そのようですけれど……」

篠原はそう答えながらも、あまり事情を知らない様子だった。院長の姪の実子に、突然、生徒のことを尋ねられてどぎまぎした顔を見せた。

「いつから休んでますの」

「さあ、事務室のほうには欠席届が出ていると思いますけれど……申し訳ありません。寄宿舎

じゃない生徒のことには、あまり目が届きませんので……」

学院の教師の職を後生大事にしている篠原は、自分の落度を発見されたように慌てて答えた。

「どうも有難う、結構よ、いずれ事務のほうに尋ねてみましょう」

実子はそう言うと、教科書と併用しているモード雑誌と、裁ちかけの教材を鞄に入れて、帰り支度をはじめた。

別に十和田熱子のことを、それ以上知ろうとは思わなかった。夫に家出されたかもしれない女が、なぜ他の人間のことにまで気を遣わなければならないのかという気持だった。

教員室を出て玄関わきの事務所の前まで来たとき、ふと気が変って、十和田熱子のことを尋ねてみる気になった。

ドアを押すと、事務員たちがまだ月謝の整理を続けている。

実子は、入口に一番近く坐っている事務員に声をかけて、十和田熱子の欠席届が出ているかどうかを尋ねてみた。事務員が書類をめくったが、熱子の欠席届は出ていなかった。

届も出さずに一週間も休むというのは、どういうわけだろう。この頃の生徒は、衝動的に学校を休んで遊びはじめるのかもしれない。そう思いながら、この頃の若い生徒たちは——という感慨を抱く自分自身に実子は驚いていた。

つい最近までは、まだ生徒たちと同じように若いつもりだった。彼女たちと同じように物事を感じられる自信があった。それがいつのまにか隔絶を覚えている。

あの生徒たちのように、人生を衝動的に楽しめなくなっている。人生の季節というものは、

確実に死ぬのだと思いはじめているのだった。
ふと、実子は三十一歳という自分の年齢に突き当った。
「先生！」
待ち受けていたように、玄関のところに生徒が一人立っていた。実子のよく知らない生徒だった。
「なんの御用？」
「わたくし、朝岡典子と申します。あのう……十和田さんのことで、ちょっとお話ししたいことがあるんですけれど、いいでしょうか」
「ええ、いいわよ。銀座まで出てお茶でも飲みましょうか」
生徒の真剣な表情が、実子に好奇心をおこさせた。熱い日射しの中を歩くよりはと、タクシーを拾った。学院から最寄りの国電の駅まで、十分ほど歩かねばならない。
タクシーの中も熱く灼けていて、ビニール張りのクッションは汗ばんで気持が悪かった。
車に乗るなり、朝岡典子という生徒は喋りはじめた。
「あたしは先生の授業に出席している生徒じゃないんですけれど、内緒で今日だけ出席したんです」
「あら、どうして……」
「十和田さんが来るんじゃないかと思ったんです。あのひと、今までにもほかの時間をさぼっても、先生の授業にだけは出てきたものですから……だから今日も、もしかしたら来るんじゃ

ないかと思って……」

「まあ、そうなの、あなた十和田さんとは……」

「大阪の高校でずっと一緒だったんです。このまえ約束をすっぽかされてからずっと逢ってないんですよ。電話をかけてもいつも留守だし、学校には来ないし……今まで一度もそんなことはなかったもので、あたし心配してたんです。そしたら、今日先生が十和田さんのことおっしゃったでしょ、だから御相談してみたんですの」

「そう、わたくしも別に十和田さんに用事はないけれど、そんなにずっと学校にも音沙汰がないんじゃ心配だから、一緒に覗いてみましょうか。十和田さんに学校を止められたら、生徒が一人減って困るわ」

実子は冗談を言ったあと、すでに銀座近くまで来た車の運転手に、そのまま巣鴨までまわってくれるよう頼んだ。

なぜ十和田熱子を、マンションまで訪ねてみる気になったのか、自分でもわからない気持の動きだった。そんな気分になったのは、やはり夫の家出が心に重たくのしかかっていたせいだろうか。なんでもよいから、ほかのことに目をそらしていたかったのだ。

十和田熱子のマンションは、駒込の六義園のそばにあった。新築らしく、フェニックスの置かれた玄関には、まだ壁の乾ききらない漆喰の匂いがする。

高級の部に属するマンションらしく、玄関に立った実子たちの足もとに、冷房のよくきいた空気が流れてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton